



(文 : 県立広島大学地域連携センター 上水流助教 写真左)

今年度多文化共生をテーマにコラムを書きます県立広島大学の上水流(かみづる)久彦です。少し自己紹介をしますと、文化人類学が専門で、文化人類学は人間がどんな風に暮らし、その暮らし方の意味は何か、如何なる問題があるのか、人間とはどんな生き物なのかを考える研究です。その研究のためには異文化を経験する必要があり、私も昔、台湾に2年弱住みました。

さて、安芸高田市も力を入れている多文化共生ですが、多文化共生は文化の異なる人々が互いの文化を大事にし、自分の文化に誇りを持って、困らないように暮らしていくことです。日本には多くの外国から来た人(外国籍市民)が住んでいます。そして、彼がいないと日本社会が成立しません。例えば、最近では福島で放射能問題から中国の研修生が帰国し、農作物の収穫さえできない事態が発生しました。

ただ実際には多文化共生の実践は簡単なことではないようです。生活習慣や言葉が違う人々どうしの間では、摩擦や誤解が生じるからです。家族や友だちの間でも問題が起こるのですから、本当は少々摩擦があっても当然なのですが、そうはなりません。そして、「日本で暮らすのだから、日本人らしく暮らして欲しい」という声が出てくるようになります。正しい意見のように思えますが、本当にそうでしょうか。

もし、広島の人が東京に引っ越して東京の人から「ここは東京だから、広島らしい考えや広島という言葉を使うことはやめてください。それから広島風の風習も持ち込まないでください」と言われたら、どう思うでしょうか。納得いかないと思います。外国の人に自分たちの文化を捨てて日本人と同じように暮らささいというのは、この考えと同じです。多文化共生はそうではなくて、お互いが快適に暮らせるように、互いに少しずつ自分のあり方も変えつつお互いの暮らし方を大事しようというものです。もちろん、ゴミ出しの方法など最低限のルールは守りつつです。

2011(H23)年7月号 広報あきたかた掲載